
clover room case1

fairy

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

clover room case 1

【Nコード】

N6276K

【作者名】

fairy

【あらすじ】

皆さんにとって『幸せ』ってどんな事ですか？

大好きな人と一緒にいること

お金持ちになること

…etc

人それぞれですね

幸せを本当に願う人だけが行ける場所

それが
clover
room

(前書き)

clover roomに訪れた4人の中の1人目の話

甘いファンタジーです

case 1 会いたくて…

川原で1人、寝ている高校生がいる。

それが俺、モトムラハルキ x 学園3年の元村陽生

一応生徒会長

結構人気もあるんだ

「あゝあ…皆怒ってるんだろおなあ」

今日わ生徒会での仕事をさぼり中

「でも何か今日わ何もやりたくないんだよな」

― 学校 ―

副会長であり、陽生の幼馴染 シノヤマヒロシ 篠山洋が陽生を校内探し回ってる

「あいつどこ行っただ？」

「洋ちゃん」

そう呼ぶのはもう1人の幼馴染 キタレイナ 喜多怜奈

「怜、陽生知らない？」

「知らないあい

珍しいね、はるちゃんがさぼるなんて」

「ったく

見つけたら即連絡ちょうだい」

「うん」

「ところでさつきから 匂いしてるんだけど何作ってたん？」

怜奈は料理部の部長

いつも何か作っては生徒会に差し入れしてくれる

「今日はガトーショコラ」

「めっちゃ美味そう！！ もちろん生徒会に持っていくつもりだったんだろ？」

目を輝かせてニヤニヤしながら洋が言う

怜奈もニコツと可愛く笑う

「はるちゃんいないなら持っていくのやめようかなあ」

「怜奈は陽生一番だからな」

「さすが〜わかってるね」

こんなバカ騒ぎはいつもの事

俺たちはいつも一緒ですつとこのままだと思ってた

―川原―

『静かだなあ…』

俺は夕暮れ時のこの川原が好きだ

昼間のような暑さはなく、爽やかな風が吹く

空はもうすぐ青から赤に変わる、混ざって紫っぽいところもある

そんな時、彼女に出会ったんだ

「きゃあああぁー!!」

俺はハッと目が覚めた

『うるせえなあ』

体を起こした瞬間

ドン!!!

「いつてえ」

「ごめんなさいッ

大丈夫ですか!？」

目の前には

髪が栗色のふわふわしたロングの天使

それが彼女の第一印象だった

「あのお」

我に帰った

「あ。大丈夫だから」

「じゃなくて ×学園の元村陽生さんですよ?」

『なんで俺の事知ってるんだ?』

「私の事覚えてませんよね...」

俺は固まっていた

「私、 高等学校の2年、 畑野莉音です」
ハタノリオン

高等学校は隣りの金持ち学校
ここの学校長とウチの学園長は兄弟でよく学祭や生徒会同士でも仲
良くしている学校だ

先月も生徒会企画の合同パーティがあつた

ピロロロ...

見つめ合つてた二人のあいだに陽生の携帯がなつた

『怜奈』

「はい、何？」

「はるう！！！」

「お前どこにいるんだよ」

「げっ洋かよ」

「悪い悪いちゃんと埋め合わせするから」

ふと横を見ると

莉音の姿はなかった

だが手にはいつの間にか紙切れがあつた

洋の話をききながらみると

『また明日ここで待ってます。 莉音』

俺はこの瞬間から彼女が頭から離れなくなつたんだ

「おいっ陽生」

聞いてんのか？
おーーーーいつ」

「次の日」

「おっはよーん」

肩に手がポンツ

「なんだかご機嫌ですなあゝ陽生くん？」
「そうゆう洋くんはご機嫌ななめ？」

二人してニコツと笑う

「さあ、昨日は何をしてたのかな？」
「はいはい！私も知りたあい」
怜奈も入ってきた

「別に…
しいて言えばデート？」

…沈黙

「マチで！？えっ誰だよ」
「内緒」

「えゝ俺達の間内緒なんてないだろお」

「内緒」

男2人は盛り上がる

『はるちゃんにそんな人がいたなんて知らなかった…』

ー放課後ー

俺はさっさと生徒会の仕事を済ませて急いであの川原に行った

ハアハア

彼女を探す

「あれっいない？」

疲れて寝転んだ瞬間
バサッ

何かが沢山落ちてきた

「なんだ、これ」

「四つ葉のクローバー 見つけちゃいました」

莉音だった

俺はあの天使の笑顔を見上げていた

「こんなにいっぱい すごくないですか？」

「知らないの？」

この川原は昔から四つ葉の宝庫なんだよ
まあ昔よりは減ったけどね」

「そおなんですか」

そう言いながら莉音は俺のとなりに座る

「私小学生の時引越してきたんですよ」

「へえ、ホントはどこの人なん？」

なんてどうでもいい話を毎日俺達はこの川原で話してたんだ

「ホント最近機嫌いいよね」

「陽生？彼女と毎日会ってるみたいだしな

まあ生徒会の仕事ちゃんとやってくれるから俺は問題ないけど

…怜、気になるの？」

怜奈は明らか嫉妬していた

「だってウチらに内緒で…」

洋は少し考えて

「怜奈、明日の日曜、俺とデートしない？」

「嫌」

「即答かよ」

陽生が明日水族館行くらしいから一緒にどうかなあって思ったのに

「行く！！！」

洋はニヤリ

「……………何よ」

「ホント怜って陽生好きだな、昔っから」

「私にとって陽生は王子様だもん」
「はあ!？」

「お父さんが死んだ時ずっとそばにいてくれた」

俺達が小1のとき怜奈のお父さんが交通事故で亡くなった
だから怜奈の母親と兄貴が働き、怜奈は家の事をやっていた

「無理して笑わなくていい、俺達の前では泣いていんだよ
って言ってくれた」

「俺もその時いたんだけどな」

「何か言った？」

「いえ、もう1人側にいる事忘れてないかなあって思って」

「あゝあ執事がいたわ」

「俺、執事!？」

ひでえな（´、*）

「（爆笑）」
ーデート当日ー

水族館の前に莉音が先に待っていた。

白のワンピースでカゴバッグを持っていた。

遠くで陽生は莉音の姿を見つけた。

『今日も一段と可愛いなあ』

その後ろに怜奈と洋が付いて来ているともしらずに…。

「あれっ莉音ちゃん

早くない？

いつからいたん？」

「陽生さん！

そういう陽生さんも15分前に来るなんてさすが生徒会長さんです
ね」

…いや、学校行事なら時間ギリギリに来るけどね
この娘、天然？

「どうしたんですか？」

莉音が顔を覗く

………まいつか

「行こっか」

「えっ今の沈黙なんですか？」

「ん？何が？」

「えっえっ！？」

「何か楽しそうだなあ」

………

「あのカゴバッグ絶対手作り弁当だよな」

.....

「可愛いし、天然系な感じ？」

何か陽生もべた惚れだし、俺たちも普通に楽しもつか」

「嫌」

「即答かよ」

「絶対いつもみたいに性格が合わなくてすぐ別れちゃうんだからその前に私達があの女の正体暴いてやる！」

確かに陽生は何気に顔もいいし生徒会長って事で寄ってくる女が多かった

そして結局性格が合わなかったりですぐ別れちゃうんだよね

今までずっと側にいた女といえば怜奈だけだろう

その時

近くにいた女の子2人が何やら騒いでいる声が聞こえた

「ねえ、あの子畑野さんに似てない？」

「えっホントだあ」

でも彼氏君と違う人と一緒だよ」

「ええーあんなにラブラブなのにねー」

……えっ？

「あつても……」

「ちょっと洋ちゃん！

何ボーツとしてるのよ！早くっ」

「怜奈、来て」

「はっ！？」

洋は怜奈の手をつかんで、あの2人組のところへ行つた

「ちょっと洋ちゃん」

「ねえ、今の話詳しく教えてくれない？」

「洋…ちゃん？」

そのころ

俺達わ水族館を一回りしたあと、莉音が作ってきてくれた弁当を食べていた

「うん（＾　＾＊）

やっぱり手作りっていいなあ」

「クスクス

喜んでもらえて嬉しいです

でも陽生さんモテるし、色んな方が手作り弁当とか持って来るんでしょうね」

「ああ…」

まあないこともないけど、幼馴染がさ料理得意でよく作ってくるんだ

だから彼女じゃない限りそっち優先しちゃうんだよね」

「へえ、大事な方なんですネ」

「うん、妹みたいな

てかさ、陽生さんって呼ばれなれてないから呼び捨てかハルとか呼んで？」

「えっあっ…じゃあハル」

俺は自然と笑っていた

「うん、次どうしよっか」

「あっイルカショーみたいですよ」

「いいねえ」

俺たちはイルカショーを見て水族館を堪能した

「莉音ちゃんち門限18時半だっけ？」

「あっはい…」

「そっか」

さすがお嬢様学校に通うだけあるよな…

初デートだし、しょうがないかと俺は残念がった

そして他愛もない話をしながらあの川原を歩いてく

「やっぱこの夕日は一段と輝いてみえるよね」

いつも会ってた時間より暗く、もう日が落ちかかっていた

「あの、もうここで大丈夫です」

「えっ？暗くなるから家まで送るよ？」

「いえっ」

莉音は断固拒否する

俺は親に会うのがまずいのかと自然に不審に思わなかった

「ねえハル

いつせーので後ろむいて振り向かずにバイバイしよっ」

「へ？なんで…」

「いいじゃないですか

一度やって見たかったんです」

莉音は変わらず笑顔で言う

「いつせーのーでっ」

俺は反射的に後ろを向いた

「ハルツまたね！

今日は楽しかったです」

「おう、またな」

数歩歩いてやつぱ莉音が気になった
そつと後ろを向く

「…あれっ？」

もう彼女の姿はなかった

「はっええ〜」

そんなに時間やばかったかなあ…

俺は名残惜しむようにすっかり暗くなった空を見上げながら帰った

帰ると同時に洋と怜奈がやってきた。

「陽生話がある」

陽生は目に見えてテンションが高かった

「陽生、真剣に聞いて欲しい」

怜奈は黙ったまま、俯いているし
いつもふざけてる洋はかなり真剣

「…なんだよ」

「お前が最近会ってる子は畑野莉音じゃない
双子の妹の詩音だ」

「は？」

何言ってるの？

双子だとしてもなんで妹の方だってわかるわけ」

「姉の莉音の方は今、意識不明の重体なんだ」

「何それ

意味わかんないよ」

「はるちゃん

本当なの…

信じれないかもだけど、妹の詩音には彼氏もいるんだ
完全に騙されてるんだよ」

「信じられるわけないしょ」

怜奈は嫉妬からか
キレた

「何で信じないの？

私達よりあの子選ぶわけ!？」

「そういうワケじゃないけど」

「陽生のバカ！」

「だいつつ嫌い！」

怜奈は家から出て行った

「初めて呼び捨てにされた…」

怜奈の気持ちを知ってる洋は陽生につかみかかる

「お前が誰と付き合おうが構わないけど

あの時の約束覚えてるよな」

「…悪かったよ」

陽生を飛ばし、洋も出て行った

陽生と洋は怜奈の父親が死んだ時、怜奈をずっと笑顔にする、俺達
が泣かす事は絶対しないと誓っていた

次の日

3人揃う事はなかった

洋は怜奈と一緒にいたが元気はなかった

陽生は午後の授業をサボって川原にきていた

いつの間にか寝ている

隣りには変わらず莉音が座っていた

「ダメですよ

こんな早くからサボったら」

ニコツと笑う莉音に安心した

やっぱりあの2人は何か勘違いしてるんだ

「ねえ莉音って兄弟いる？」

「ええ

：私とは全く正反対の妹がいます
顔は同じなのに」

双子は本当らしい

「双子？」

「はい

ハルは1人っ子ですよね」

「うん

でも怜奈や洋がいたからそんな感じしないけど」

そう

俺達3人はいつも一緒にケンカしてもすぐに仲直りするような関係
大抵の事は信じる

でも莉音の言うことも嘘には聞こえない
どうすればいいのかな

心配そうに見てる莉音に気付かず物おもいにふけっていた

「さて、帰ろうか」

「えっ」

まだ日没まで時間はある

でもハルは1人になりたいみたい

「送る」

黙って莉音はついていった

その姿を帰る途中の洋が見ていた

次の日

高等学校の前に洋がいた

この前情報をくれた子が来る

「今くるから少し待って下さいね」

すると

入口から陽生とデートしていた女の子がやって来た

「麻由う、なあに？」

少しギャル系の口調

「この人が私に会いたかったという男？
っていつかだあれ？」

「怒」

陽生がいう天然系の天使：「ってどこがだよ」

「急にごめんね

俺は ×学園の篠山洋っていいいます」

怒りをこらして落ち着いて話す

「聞きたい事あるんだ

ウチの学校の元村陽生って知ってるよね？」

「えっ陽生先輩？」

知ってるに決まってんじゃん

あんなイケてる生徒会長がいるなら ×学園行けば良かったって後悔するほどよ

まっ今は大地がいるから関係ないけどお」

「えっ最近毎日会ってるよね？」

「はあ？話した事さえないけどお？」

「こないだだっ一緒に水族館行ってたじゃん」

「水族館なんて興味ないわよ

莉音じゃあるまいし」

姉なら行くのか…？

「…お姉さんってまだ意識戻ってないんだよね？」

「……ええ

双子だからか何となくわかるのよね
あの子戻ってこないかもって」

「ごめん……」

「いいけど

用ってそれだけえ？」

「いや、もう少しお願いしてもいいかな」

話が噛み合わない

洋は陽生を呼ぶ事にする

30分位経った

学校の近くのc a f eで詩音と洋がいた

「洋、何？」

「えっマヂで陽生先輩だあ」

『うるせえ、誰だよ』

視線が洋の向かえに座る女の子に
よくみると

「えっ莉音!？」

かなりビツクリした

顔はホントに瓜二つ

でも若干髪の長さが違っし何より話し方が違い過ぎる

少し3人で話をしてみた
やっぱり陽生が毎日会っている女の子とは違う

「陽生先輩

私に似た人に会ったのはいつ？」

「2週間位前だよ」

少し考える詩音

「悪いけど

その子姉の莉音でもないし」

「何でわかるの？」

「だって事故があつてからもうすぐ一ヶ月経つから」

陽生は驚き、言葉を失う

「まあ私たちに似てるなんて驚きだけどお

騙されてるのは確かね

ウチ門限なんてないし」

そう言つて詩音は帰つていった

陽生はまだ呆然としている

洋もどうしたらいいかわからない感じ

無言のまま2人は家に着いた

「洋、信じなくてごめん」

そう言った陽生は次の日学校には現れなかった

「ねえ、洋ちゃん

ハルちゃんと昨日会ってたんでしょ」

「……………うん」

「何があつたの？」

「……………怜奈、今日帰り畑野莉音のどこ行ってみない？」

「えっ？」

陽生は家でボーッとしていた

莉音の事を考えて眠れなかった
もう夕方になる

自称莉音は何者なんだろう？

嘘ついてたんだなあ

もう会わなければ大丈夫だよな

……………会わなければ

本当にそれでいいのか…？

『いいわけ…ないっ』

陽生は急いで着替え、オレンジに染まる景色の中、川原に走る

莉音はいつもどおりだった

「ハルっ」

いつもどおりの俺の好きな笑顔

「見て

四つ葉にテントウ虫いたの」

指に乗せたテントウ虫を見せる

「それも嘘？」

陽生が口を開ける

「えっ？」

風がザアッと二人の間を吹き抜ける

それと同時に莉音の指のテントウ虫も羽を広げ飛び立った

「どうしたんですか？」

「聞いたんだ

畑野莉音って子は今意識不明の重体らしい」

莉音は黙る

空には雲が出始めていた

「君は…だれ？」

軽く雨が降ってきた

「ハル

信じて下さい

私は畑野莉音です」

「だからさ」

「あの日、あの事故の日ね、あなたをみかけたの」

莉音は雨の中話続けた

「友達でもいいから仲良くなりたくて話かけようと追いかけたら事故にあっただんです」

陽生は黙ったまま

「あっハルのせいだとかいうんじゃないんですよ
むしろ嬉しいの

あなたへの思いがあったから少しだけ私に時間をくれた
日が昇っている間だけ」

莉音は笑って空をみる

「あなたに少しでも覚えてもらいたくて…
会いにきたんです」

「でも

それも今日で終わり」

「えっという」

日没と共に雲が太陽を隠し始めた
莉音も消え始めていた

「ハル

少しはあなたのなかにいれたかな」

「ちょっと待って」

陽生は莉音の腕を掴めなかった

「ばいばい」

陽生の目の前で彼女は消えていった

雨が本降りになって陽生に襲いかかる

『本当だったんだ』

雨の中たたずむ

雨なのか涙なのかわからないものが頬を伝う

どの位の時間が経っただろうか

3度目の着信に出る

「
…」

「陽生？」

洋からだった

「総合病院に今すぐ来い
莉音さんが…！」

陽生はハッとした

『そうだ

彼女はまだいる』

電話を切り走り出す

総合病院には洋、怜奈、詩音がいた

ずぶ濡れのまま病院についた

「はるちゃん！」

「莉音は？」

「どうなったの？」

「はるちゃん顔色悪い

急いで拭かないと」

怜奈を突き放し洋につかみかかる

「莉音はどうなったんだよ！」

そのまま洋に倒れこむ

「お前スゴい熱……！」

「莉……音」

怜奈は看護士にタオルを借りて戻ってきた
意識が朦朧するなか、詩音が話出す

「今は莉音安定してる

でもさっき結構やばかったらしくて今夜が山場かもって」

フラフラした足で扉を開けて莉音の側に行く

『莉音、戻ってきて』

陽生はさっき掴めなかった手を取り動こうとしなかった

『 充分なほど君は僕のなかにいるんだよ 』
それを見守って洋と怜奈は病室の前の椅子に座った

朝になる

4人は寝ていた

陽生も手を握ったまま

ふと目を覚ます

「生徒会長のくせにまた学校サボってるんですか」

陽生の目の前にはあの天使の笑顔があつた

「莉音！」

その声に驚いて病室の前で寝ていた3人は急いでドアを開ける

陽生は力強く莉音を抱きしめていた

莉音は戸惑いながらも詩音に気付き手をふる

3人は安心した

詩音は仕事で日本にいなかった両親に電話をかけにいき、洋と怜奈は病院の中庭を歩いていた

「何か不思議だね」

「そうだな」

「ハルちゃんのお姫様は私じゃなかったみたいだし」

洋は怜奈の手を握った

「俺はずっと怜奈の側にいるよ」

真面目な顔で怜奈を見る

怜奈は顔が赤くなってる事に気付いた
目を逸らし背を向けて

「わっ私の執事だもんね」

「えっそうじゃなくて」

手をつないだまま怜奈は歩きだした

「顔あつつう」

「ちよっ、怜奈あ」

その間も無言のまま陽生は莉音を抱きしめていた

莉音は陽生が泣いてる事に気付く

「ハル

「私まだあなたの中にいるの？」

涙目で莉音を見る

「莉音しかいないよ」

e
n
d

（後書き）

死と生の狭間で莉音は陽生を思う。

その思いがclover roomへの鍵となる。

死を目前とする人の願いを叶えるには条件があった。日が出ている間だけ姿が見える事と期間は一月。

その中で本当に願いを叶える努力をする人だけが幸せになれる。

莉音は結局死ぬ事はなかったけど、それも努力の結果だったのでしよう。

case2は夢です。

どんな幸せの形があるでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6276k/>

clover room case1

2010年12月30日18時42分発行